

Title	顎顔面補綴領域における3D, 4D解析を用いた新たな研究の展開
Author(s)	中島, 純子
Journal	歯科学報, 120(4): 491-491
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/5363">http://hdl.handle.net/10130/5363</a>
Right	
Description	

顎骨疾患プロジェクト・東歯学会共催シンポジウム  
 「東京歯科大学における新たな研究の展開」  
 ～New research fields of Tokyo Dental College～

顎顔面補綴領域における3D、4D解析を用いた新たな研究の展開

東京歯科大学オーラルメディスン・病院歯科学講座 中島 純子

頭頸部腫瘍に対する治療はチームアプローチが必要になる。歯科口腔外科医や頭頸部外科医が腫瘍に対して直接的なアプローチを行う一方、顎顔面補綴医は腫瘍に対する治療の支持療法の担い手として、治療による機能障害、有害事象の軽減のために、治療の初期から患者の治療に参加している。大きな顎骨欠損を有する患者の場合は、対応ができる歯科医療機関に限られることもあり、腫瘍の予後経過観察が終了した後も、その患者の生涯にわたり口腔機能の維持・管理に携わっていくこともある。

腫瘍に対する治療成績の向上に伴い、手術後、放射線や化学療法後のQOLの維持、社会復帰が重要になっており、顎顔面補綴領域では顎骨欠損部の補綴治療のみならず、治療時の有害事象の軽減、治療後の口腔機能障害に関する臨床研究が中心に行われている。

頭頸部腫瘍患者では、口腔内の器官や舌骨上筋群に侵襲が及ぶため、嚥下障害を生じることが多い。周術期の嚥下障害のみならず、放射線治療による晩発性の嚥下障害、加齢や他の疾患を併発した際に顕在化する嚥下障害のリスクも有するため、嚥下の動態を正確に捉える必要がある。嚥下の画像評価は、嚥下造影検査と嚥下内視鏡検査が標準的検査方法として多く用いられているが、2007年に開発された320列面検出器型CT(320-ADCT)は、動く3D-CT画像を構築することができるため、嚥下運動の立体的・動的画像化や解析を可能とし、嚥下障害の臨床や研究において斬新かつ新戦略として世界的にも注目をされている。これまで、320-ADCTを用いた嚥下評価に関する臨床・研究を実際に行っている施設は、国内外でほぼ1施設に集約されていたが、本装置を所有する市川総合病院では、口腔がんセンター、放射線科のご協力の下、本装置を用いて頭頸部腫瘍患者の嚥下動態の解析に関する臨床研究を行っている。本シンポジウムでは、他の検査では見ることができない、舌骨の3次元動的動態を紹介するとともに、顎顔面補綴の臨床と今後の研究の方向性についても報告をする。

《プロフィール》



＜略歴＞

1997年3月 東京医科歯科大学歯学部卒業  
 1997年4月 東京医科歯科大学大学院歯医学総合研究科  
 (顎顔面補綴学専攻) 入学  
 2001年3月 同 修了 歯学博士  
 2001年4月 東京医科歯科大学歯学部付属病院顎口腔機

能治療部医員

2004年2月 東京医科歯科大学大学院歯医学総合研究科  
 助手

2004年4月 防衛医科大学校歯科口腔外科助手

2008年4月 防衛医科大学校歯科口腔外科学内講師

2015年9月～2016年8月

Medical University of South Carolina, Department of Head and Neck Surgery, Institute for Voice and Swallowing, Visiting Scholar

2018年4月 東京都健康長寿医療センター研究所研究員

2019年4月 東京歯科大学老年歯科補綴学講座講師

2020年4月～東京歯科大学オーラルメディスン・病院歯科学講座講師